群馬司法書士新聞

発行所 群 馬 司 法 書 士 会 発行人 岡住貞宏 編集人 島田貞夫 2012年1月10日発行・No.9

震災対策特別号

仮設住宅の現状を探る カメラが見た巡回訪問2 群馬県内の相談会

特_集

福島県内の仮設住宅の現状を探る

2012年正月、群馬司法書士会に一通の年賀ハガキが届いた。差出人は福島県の仮設住宅に入居されている方である。裏面に年賀の言葉はなく、仮設に入居するまでのいきさつと、現状がびっしりと書かれていた。最初は「ただの様子見避難」と思っていたこと、現在は知人も友人もいない仮設住宅団地にやっと入居できたこと、米や野菜などの物資が不足していること、年末年始を仮設で迎えることが書いてあった。そして最後に、「お忙しいとは思いますが、ここの仮設を見に来てほしいです」と書かれていた。私たちはこのハガキに、仮設住宅団地のなかでの孤立、仮設団地が所在する地域での孤立、そしてボランティアやマスコミひいては国民的な関心からの孤立が、凝縮されているように感じられた。私たちは仮設の現在の姿を知る必要があると考え、福島県内の仮設住宅を訪ね歩いた。以下はその現状報告である。

群馬会の対策本部会議でこのハガキを読んだとき、南相馬市の体育館で聞いた、「ほんの 二三日の避難と思っていた」というお年寄りの言葉や、福島の仮設住宅を訪問した時に聞い

た、「とるものもとりあえず避難したために、祖母の入れ歯さえ置いてきてしまった」という息子さん夫婦の言葉を思い出した。また、いままで暮らしていた集落の人たちと一緒の仮設に入れた人がいる一方、同じ市町村であっても別の集落から来たために、まだ同じ団地に住んでいる人の名前もよく知らないという話を聞いたことを思い出した。

そして、3月11日から半年後の9月11日、約2000軒の仮設住宅を回ったとき出会ったボランティアは、豚汁の炊き出しをしていたひと組だけだったことも思い出した。9月の強い陽ざしの下、やけつくようなコンテナ型の仮設住宅が並ぶ郡山市内の団地の、ひっそりした様子も思い出した。



仮設住宅団地を訪ねるのは難しい。公園や学校跡、公共施設跡や空き地などにひっそりと作られた団地の所在は、地図を見てもわからない。田村市などは道路に案内表示があるが、何の案内もないところの方が多い。仮設団地を探すには、近くまで行って徐行しながらまわりを見回し、それらしい建物群の発見につとめることになる。

見つからなければ、歩いている地元の人などに聞いてみる。すぐに教えてもらえることもあるが、地元に仮設住宅団地があること自体知らない人も少なくない。農協に集まっている農家の人たちに聞いても、ほんの一キロほどしか離れていない農地の中に仮設の団地があるのを誰も知らなかった。福島市の信夫山のトンネルのすぐ脇にある仮設の団地が、そこから二百メートルほどの位置にある福島市保険福祉センターで聞いてみてもわからなかった。なぜなのだろう。仮設の住人は、団地が所在する自治体の住民ではなく、避難元の自治体の住民だからなのだろうか。1枚のハガキのなかに今までの仮設住宅訪問に際して感じた問題点が、数多く浮かび上がっている気がした。

谷間に建つ仮設

1月13日午後、小雪のちらつく中、田村市の仮設団地をいくつか回った。9月と11月に続く三度目の訪問となる団地もあった。道端の日陰には雪が薄く残っていた。

低い山を回る道を進んで、狐塚 団地に入る。三春ダム近くにある 小さな公園の奥に作られた団地で ある。周囲が高く、川に面してい るため、谷間におりたように感じ



られる。9月に来たときはとても暑かった記憶がある。水害や土砂崩れが気になっていた団 地だった。

陽がかたむいて風が冷たい。雪がところどころ残っている。子どもたちが何人か、自転車 で遊んでいる。

「学校までどうやって行くの」と聞くと、「みんなでバスで通っている」と答えてくれた。 子どもを助手席に乗せた若い女性が車で通りかかった。

「去年の大雨の時は大変だったでしょう」と聞くと、「ここはそうでもなかったですよ」と答えた。

「寒さはどうですか」と聞くと、「それほどでもないです」という。陽あたりはよく、背後の丘が風を防いでいるらしい。ただ、二重サッシになっても、結露はひどいという。

団地の入口に仮設の店舗があると聞いて行ってみた。食堂とコンビニがあるという。右側 の食堂は営業しておらず、真ん中のコンビニのガラスは結露で曇っていた。中に入ると、店



の奥にあるコタツの中から若い男 性がこちらを見ていた。

「群馬司法書士会の者です」と 名乗り、仮設の取材に来ているこ とを話すと、こころよく迎えてく れた。仮設の店舗で雑貨店「渡辺 商店」と「政食堂」を経営する渡 辺さんだった。商店と食堂は内部 でつながっていた。

「店舗自体は無償です。でも内

装や陳列ケース、食堂の備品などは自費。内装費は援助があることになっているけど、まだ 出ない。食堂の営業は昼と夕方。食堂は少しでも暖かく、のんびりできるように床を作って 上がれるようにしています」

渡辺さんはコタツの先の食堂を眺めながら話した。

話しているうちにもお客さんがやってくる。この仮設から外部に買い物や食事に行くには、 車を使うか、土手の上の道路を走るバスを使うしかない。狐田の仮設に住む人にとって、渡 辺さんの店がどれほど身近なものか、よく感じることができた。

「でも、売上が上がると東電からの補償金が減らされるんですよね」

渡辺さんがふと漏らした言葉がとても気になった。午後4時、気温は3度ほどだった。道路はすでに凍り始めていた。

凍てつく仮設

国道288号「都路街道」を東に向かう。「御前池公園」の仮設団地に着いたときは、すっかり日が暮れていた。御前池公園の仮設団地は、三春から都路に向かう国道を船引の中心地で右折した先にある山の北斜面に作られている。日陰になるためか、仮設に向かう坂道の雪は凍てついていた。団地のあちこちに雪が残っており、仮設住宅の軒から細く短いツララが

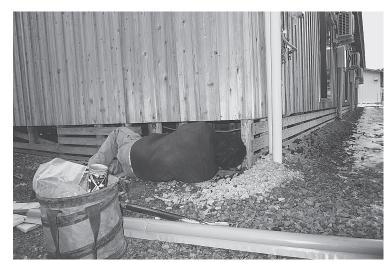
下がっている。気温はすでに零下だろう。

団地の中を歩くと、住宅の床下 にもぐりこんで作業している男性 がいた。

「床下の断熱工事ですか」と聞 くと、

「破裂した水道管の修理だ」と答える。

仮設住宅は大部分が棟割長屋式



である。床下はほぼ吹きさらしだ。特に両端の住宅の水道管が凍って破裂するのだという。 田村市船引第二運動場の仮設団地は、床下部分が白いビニールシートでおおわれていた。 床下に吹き込む風を防ごうという工夫なのだろう。しかし、ここでもやはり水道管の破裂が 頻発していると聞いた。



「修理費用は」と聞くと、

「自己負担です」という。後から自分で東京電力に請求するのだ そうだ。

仮設住宅の建設は国と県が主導して行なったはずである。仮設を作る地域の気温くらいは事前に把握できていたはずだ。被災三県の仮設は「寒冷地仕様である」とされていた。にもかかわらず、構造

は以前のものと大差なく、断熱材も、床材も、冷暖房設備も明らかに不十分だった。冬が 到来する時期になって、大慌てで断熱材と二重サッシを後付けし、居室(一つにだけ)簡 易畳を入れ、エアコン一台を増設したのである。これら工事に対応するため、入居者は家財 道具の移動を強いられた。そして工事の施工業者には、追加工事費用が支払われたのである。 「お役所仕事」の不合理と不経済を感じるのは、私だけではあるまい。

相双地区の被災地・被害地は、阿武隈山地によって寒気からさえぎられている。

「とにかく寒さがこたえる。以前住んでいたところは暖かかったからね」という声を何度も聞いた。人は風土に根付いて生きる。その風土から引き剥がされ、凍てつく寒気の中、「災害応急仮設住宅」での生活を強いられている人々は、この冬をどう生き抜くのだろうか。

眠れない仮設

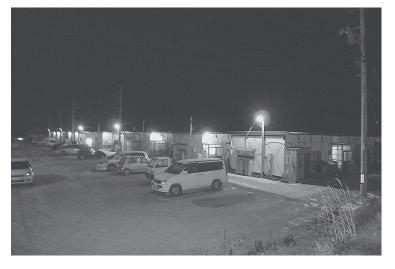
冬型の気圧配置で生まれた雪雲が会津方面から磐越道沿いに阿武隈山地まで流れ込み、山越えの道は雪に覆われ、一部は凍結していた。葛尾、浪江、飯館を経由して相馬市に入る。市街地から7キロほど北西、中核工業団地西地区の空き区画を利用した大野台仮設住宅団地(第1から第8まである)を訪問するためである。

大野台に到着したのは午後9時過ぎ。雪はなかったが氷点下の寒さで、工業団地内のよく整備された道路の歩道はところどころ凍っていた。昨年9月1日にこの団地を訪れたときは、まだ誰も入居していない仮設団地や、これから本格的に入居が始まる団地があった。現在ではどの団地も入居済みのようで、駐車場や仮設住宅の入口脇の路上に車が停っている。

夜の工業団地は暗い。その中で仮設住宅団地の夜は明るい。電柱の街灯以外に、各棟にいくつも白い蛍光灯が取り付けてあるからだ。その光が仮設住宅の鋼板の壁に白く反射している。

「おれらはもともと真っ暗な中で寝てた。仮設は街灯が明るくて 眠れやしない。カーテン引いても ダメなんだ。なんでこんなに明る くしなきゃならねえのか」

福島市内の仮設を訪れたとき一 人暮らしの男性が怒っていた。人 間は環境に適応して生きる。真っ 暗だと眠れない人もいるだろう。 他方、暗くないと眠れない人もい



る。原発被害者の大半の住まいは明るい市街地ではなかった。夜の闇に慣れた人々が多い。 そうした人にとっては、夜の仮設の明るさが睡眠を妨げる結果を生んでいる。

「昼間はまあいいさ。いろいろすることがあるから。夜、横になると、これからどうなるのか考えずにはいられない。考えはじめたら、もう眠れないよね」

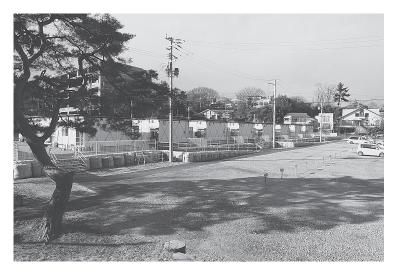
二本松市内の仮設で30代の女性から聞いた話だ。同じようなことを他の被害者からも聞かされた。それぞれが抱えている不安や悩みは、それぞれ自分だけで抱え込んでいるようだ。 街灯の白い明かりに照らされた仮設の中で、眠れぬ夜を過ごしている人は少なくない。

溺れる仮設

須賀川市かみきた仮設住宅団地は、曲がりくねった狭い道を下った鍋の底のようなグラウンドに作られている。近くに細い川と池があり、周囲はすべて敷地より高い。もともと遊水池の役目を果たしていた土地を埋め立ててグラウンドにしたのだと聞いた。

平成23年9月21日、台風15号による豪雨が福島県を襲った。阿武隈水系は過去有数の増水となり、須賀川市を含む多くの市町村が水害に襲われた。

かみきた仮設住宅団地に水が押し寄せたのは21日夕刻である。午後6時50分には58世帯、 136人の住人全員に避難勧告が出された。



「腰の近くまで水が上がってきました。家財はみな水浸し。駐車場から出しそこねた車二台が水没しました」

かさ上げされた仮設に住む女性が言った。女性の話を聞く私の前には、かさ上げに使った大きな土留めの袋がある。その高さおよそ80センチ。小さな土留めがその上に積まれ、さらに砂利を敷いた地

盤の上に仮設住宅が新しく建て直されていた。かさ上げした地盤の高さは一メートルほど。 「腰の近くまで水が来た」という恐ろしさがよくわかった。

この仮設住宅団地には、「震災新聞」が届かなくなっていた。理由は「水害により仮設が 廃止されたため」とのことだった。当時の状況を聞き、また新聞を届けるために、かみきた の団地の高橋自治会長にお会いした。

「避難勧告がでたあと、福祉センターでまた避難生活をすることになりました。それまではあまり人間関係もなかったのですが、この避難生活でお互いをよく知ることができました。まず高台、それから地盤を上げたところに新らしく仮設を作り直しました。地盤をかさ上げして仮設ができるまで3ヶ月かかりました。水害の前は60世帯近くいましたが、いまの入居者は29世帯です」

招き入れてくれた住宅の居間の こたつで高橋さんが言った。書棚 にたくさん本があり、壁には絵が 掛かっている。

「本好きでしてね。でも、ほと んど水害でダメになってしまいま した」

高橋さんは笑いながら言った。 大切な蔵書をなくしてがっかりし ているのがよくわかった。



見えない将来のなか、生きる道を探さなければ

いわき市内にあるホテルで、警戒区域内の町にある寺の住職からお話をうかがった。

「被害者の方から積極的にお話をしていただけない」そう言ったところ、

「外部の人と被災者にはギャップがあります。『あんたに言ってどうなる』という気持ちがあるんですよ」と言われた。中央から常に圧迫されてきた歴史があること、しいたげられてきた歴史が人を作っていること、そうした中で、目立たぬよう、派手にならぬよう、横並びを心がけるようになってきたことなどを話された。

「そうしたことが相まって、外部の人から見れば、福島の人間は消極的に見えるのかもしれませんね」と言われた。

これからどうなっていくのか尋ねてみた。事実上元通りになることは無理であると思っている人が多いこと、しかし行政はすべて元通りになるよう主張していること、住民が「移住」という選択肢を持ち出すのは困難であることなどを話された。

「他の被災地に比べ、福島の状況はより悪い。しかし当面の生活だけは、東電からの補償 金などで何とかなっている」と言われた。

将来の課題が見えていればそれに立ち向かうことができる。また現在の生活が成り立たな

ければ、なんとかして生きる道を探さなければならない。現在の生活が成り立ち、かつ、将 来の課題すら見えない原発事故の被害者は、立ちすくんでいるしかないのだろうか。

「お年寄りは毎晩『明日も生きているかな』と思いながら寝てますよ。知り合いの葬儀社から、15%くらい葬儀が増えていると聞きました。高齢者には生きること自体にストレスがかかり、中年は生活の土台を崩されて、もうやり直せないと思っている方も多いのではないでしょうか」と言われた。うすうす感じていたことだが、地域に根ざしたご住職に聞かされると、背筋が寒くなるような話だった。

「帰還するには、まず安全な生活と、安定した収入が必要なんです」 ご住職のお話をうかがいながら、原発被害者の未来が見えないもどかしさを感じた。

福島から群馬へ

警戒区域から群馬県富岡市に避難された方の話をきくため、その方の住むアパートにうかがった。

「事故が起きるまで、東電は『絶対に安全』と言い続けていた。100%の安全というのはないのかもしれないが、東電によって町は発展していたし、ごく普通の暮らしをしていた」相双地区にある団体で働く夫を持つ女性はそう話した。夫はいま、中通りの仮設に一人暮らしして仕事場である団体に通っているという。当初は月に二度ほど群馬まで来ていたが、最近は月一度ほどに減った。年末年始はともに過ごしたという。

「3月11日の地震のときは仕事場でした。すぐに自宅に帰り、様子を確認しましたが、地震の被害自体は大したことはありませんでした。その夜、役場から無線で避難のバスが出るという知らせがあり、自分たちは2,3日分の荷物を持って自家用車で南相馬に向かいました。3月13日の爆発後、20キロ規制になり、家に戻れなくなって、ただ一日中テレビばかり見ていました。3月16日、実姉のいる群馬県富岡市にたどり着きました。何日も眠れなかったので、ただただ眠っていました」

女性は淡々と話してくれた。その後、富岡市の市営住宅に一時入居し、6月末から現在の アパートに引っ越したという。群馬県の借り上げ住宅なのだが、なぜか群馬県から家賃が払 われておらず、6万円近い家賃を自費で払っているという。

「15年ほどまえ、住宅を購入しました。毎月の返済が約10万円、ボーナス払いが約40万円 になります。とりあえずいまは返済を続けていますが、これから先はどうなるのか」

女性は原発事故で住むこともできない家のローンを支払っている。夫婦の前に「原発事故 ローン」問題が大きく立ちはだかっている。

「夫は勤務先から戻るように説得されて福島に戻りました。収入を得るためにも働いてもらうことは必要ですからね」

女性の言葉は切なかった。

群馬県に避難したのち、放射能の検査を受けたという。

「履いてきた靴は処分する必要があると言われ、しかたなくビニール袋を靴がわりにして

帰ってきました」

受け入れた実姉も、放射能の不安を感じているという。一緒に避難した孫が学校でいじめにあわないか不安だとも言う。日本中どこでも、同じ不安、同じ苦悩、同じ切なさを感じつつ生きている原発事故の被害者がいる。そしてそうした人々がいまも放置されている。そのことを実感した夜だった。

(さいとうゆきみつ)

☆ 次号の特集予告 ☆

昨年9月、12月、今年1月と福島県内の仮設住宅を巡回訪問して避難されている方々の様々な話を伺って参りました。また、支援ホットラインを通じて相談に応じてきました。その中で、避難されている他の人々の声を聞いてみたいとの要望が多々ありました。そこで、今までの群馬司法書士会の支援活動の中で記録してきた「声」を皆様にお届けしたいと思います。

次号では

『避難されている方々の声』

を特集いたします。

雪国会津の仮設住宅を訪ねる 冬季対策は、設備に問題は?

雪深い会津の地において、浜通り出身の避難者がプレハブの仮設住宅で本当に生活できているのだろうか。このような疑問をもって会津に出かけた。ところが現地を回ってみると、予想に反して仮設住宅はある程度の防寒対策がなされており、入居者も部屋の中ではあまり寒さを感じずに生活できているようで少々安心した、というのが正直な感想であった。

東北自動車道から磐越自動車道を西に向かうと、次第に雪が深くなりはじめ、会津に入る とすっかり雪景色が広がっていた。幸いなことに風はなく、寒さは大したことがなかったが、 ひとたび天候が崩れるとどのような状況になるのかは容易に想像できた。

仮設住宅を会津地域につくるにあたり、当初から防寒対策は考慮されていたようだ。木製や遮熱ボードの壁、ペアガラス、密閉製の高いドアなどが採用され、気密性も確保できているようだった。当初は隙間が開いていた床下も冬が来る前には目張りがなされ、床下を風が吹き抜けるなどという状況も避けられていた。もちろん年に数回しか雪の降らない浜通り出身の方々にとっては、慣れない寒さと雪の中で生活するだけで大変なことなのではあるが、部屋の中でストーブやエアコンで暖房をすれば、カーペットを敷く、カーテンの下部を塞ぐ、などの工夫で何とか寒さについては耐えられるようだ。

一方、当然ながら問題点も残されていた。以下、入居者らに話を聞いた中で気になった点 を述べてみる。

まず、入居者の方々で最も多かった苦情が、結露の問題であった。部屋でストーブを点けると、途端に冷たい外壁や天井に結露がびっしりと発生してしまい、こまめに雑巾等で拭き取る程度では解決できないという。人によっては、大熊町に連絡し、トイレの入り口を補修してもらうことで一定程度改善した、という人もいたが、問題が根本的に解決された訳ではない。押し入れに物を入れると湿ってしまうため、何も収納することができず、孫を押し入れで寝かせているという女性もいた。

結露対策として、大熊町は、プチプチシートを配布し、窓などに張ってもらったらしいが、 当然ながらこれでは不足である。気密性を高めた建物の構造上、やむを得ない部分もあるか もしれないが、改善が望まれる。

次に、屋根の問題が挙げられる。ひさしがわずか20センチ程度しかなく、常に雪解け水が滴っているため、せっかくの軒下の物干しが使えず、洗濯物はすべて部屋の中で干さざるを得なくなっている。それが前述した結露の問題を助長する結果にもなってきているようだ。玄関の雪囲いの中に干している家庭も多く、人の出入りに支障を来しているのも見受けられた。

屋根については、さらに問題がある仮設住宅もあった。会津若松市の松長近隣公園の仮設

住宅(249戸)である。ここは市街地より高台にあり雪が多いにも関わらず、屋根が波状の鋼板製のフラット構造を採っており、積雪が自然には落ちない仕組みとなっていた。浜通り出身の入居者は屋根の雪下ろしをした経験もなく、行政からも屋根に上っての雪下ろしを止められ、「雪が溶けるのを待つしかできない」。唯一できるのは、ひさしから張り出した雪を刺又状の手製の棒で掻き落とすぐらいしかない。フラット構造は、城北小学校北(54戸)の仮設住宅の一部の棟でも見られた。雪の影響は容易に想像できたはずであり、他の仮設はすべて傾斜屋根を採用しているのだから、なぜこのような屋根を作ってしまったのか行政の対応に疑問が残った。

また、城北小学校北の仮設住宅で、前記したフラット構造ではない棟には、屋根に雪止めがついていなかった。気温が暖かくなると雪が緩んで急傾斜の屋根を雪が滑り落ちる。私が見ている前でも、雪崩のような爆音を上げて雪が落ちてきた。入居者は、建物の近くを歩かないように注意しているというが、かなり危険であり、早期の対応が求められる。

水回りについては、水道管、とくにボイラーから管が凍結したという報告を聞いたが、私が直接聞いた中では「意外に凍らない」という意見がほとんどだった。行政も冬を迎えるにあたって夜間は水道の水抜きをするようになどと指導したというが、住民らはその必要性も感じていないようだ。といっても水抜き栓は雪の下に埋もれてしまっている仮設住宅もあるようだが。なお、以前の仮設住宅巡りでも希望の多かったお風呂の追い焚き機能については、寒さが厳しくなってより一層必要性が高いとの声が寄せられていた。

以前に群馬会が訪問した別地区の仮設住宅では、敷地が舗装されていなく、水たまりが点在していたと聞き、会津地区でも心配していたが、今回訪問したすべての仮設住宅ではアスファルト舗装されており、問題はなさそうであった。なお、通路など主要な敷地部分は大熊町の委託した業者によって除雪されていた。とはいえ、入居者らも共同で雪かきに追われており、かなりの負担となっているのは事実である。

これまで、冬季対策を中心に述べてきたが、やはり入居者にとっての一番の問題は部屋の狭さであるらしい。家族の人数によって、部屋を複数戸もらった家庭もいたが、私が話を聞いた家庭では、祖母、息子、別の息子の子供(高校生)で生活しているにも関わらず、3人というだけで部屋が1部屋しかもらえず、孫が精神的に追いつめられているという。このような家族の状況によって、もう少し柔軟に対応できなかったのであろうか。さらに収納不足は深刻で、せっかく自宅に一時帰宅しても、必要な衣類や家具などを持ってくることもできないと訴える人も多かった。どの家庭も玄関先の雪がこいに棚を設置するなどして工夫していたが、それにも限度がある。空き部屋を共同の倉庫として使用させるなどの対応はできないのだろうか。

仮設住宅での生活は当面続く見込みである。仮設住宅の設備の問題からは離れるが、入居者の最も切実な声は、政府は、いつ我々が自宅に戻れるのか、それとももう戻ることができないのか、まずははっきりしてほしい、という要望だった。いよいよ雪深くなる季節を控え、入居者のストレスはたまる一方だろう。今後とも入居者の生の声を聞き続け、少しでも快適な生活が送れるよう手助けができればと感じた2日間だった。 (いたくらまこと)

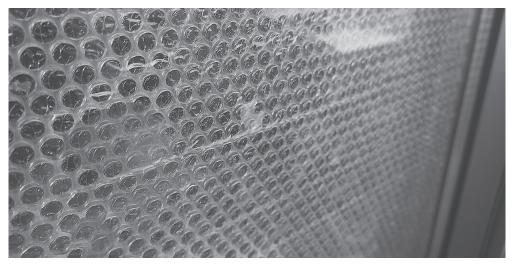
会津の仮設住宅訪問ルポを写真で見てみましょう



磐越自動車道を降り、会津若松市に入る。郊外には雪景色が広がっていた。



玄関には雪囲いがあり、防寒対策は取られているようだが。「夜に降った雪が玄関に吹き つけられ、朝方凍りつき玄関を開けるのに一苦労する」と入居者は語っていた。



結露予防と防寒のため、窓に張られたプチプチシート。



物干し金物は完備しているが、晴れている昼間でも雪解け水がしたたり落ちるため、使用 することが出来ない。庇の短さが原因だ。



屋根がフラット構造になっているため、積もった雪が自然落下しない。「溶けるのを待つしかないさ」住民はあきらめ顔で語っていた。積雪 1 メートルまでは耐えられるというが、豪雪の今年は心配だ。



松長近隣公園団地の全景。フラットな屋根には30センチを超える雪が積もっていた。



屋根から落ちた雪が通路をふさいでいる。



昨年12月4日に訪問した二本松市の仮設住宅団地。激しく降る雨で通路に出来た水たまり。 排水設備がなく、水はけが悪い土壌なので、雨がやんでも水たまりは残る。歩くのも大変だ。



住民が力を合わせて除雪していた。「皆でやるので、顔見知りにもなるし、話をするきっかけができる。」と意外な効用を話してくれた。

カメラが見た「仮設住宅巡回訪問」その2

先号に引き続きまして、昨年12月4日(日)に巡回した福島市の仮設住宅訪問の模様を写真で見ていただきます。当日は吾妻山から吹き下ろす「あづまおろし」に乗って風花が舞っていました。寒風吹きすさぶなか東北の寒さがひときわ身にしみた1日でした。



福島市南矢野目団地(208戸)。虹が出ていた。



左から、イタリアの建築家・アレッサンドロ氏、「新潮45」編集者・若杉良作氏、関西学院大学野田正彰 教授。3人は、それぞれの立場で情報収集していた。



集会場では唄が披露されていた。曲名は「ふるさと浪江」。団地を巡回して、浪江町から避難されている皆様に聞いてもらっているという。

『ふるさと離れ 遠くへきたよ ふるさとはいい けれど帰れない 帰りたいなあ わがふるさとへ みどり豊かな あの町へ ああ夢にみるよ ふるさと浪江』



福島市笹谷東部団地(182戸)。集会所で自治会長に現在の状況を聞く。



福島市飯坂町平野団地(196戸)



整然と並ぶ棟。その間を寒風が吹き抜けている。



団地内には美容室、理容室が併設されていた。



団地の東側には建てたばかりの仮設住宅が入居者を待っていた。



福島市宮代第二団地(48戸)。犬を外で飼っている方が多かった。



福島市宮代第一団地(128戸)。第二団地から数十メートル離れた所にある。住民の方が配布された新聞を手にして、新潮45の編集者に取材を受けている。いずれの団地も摺上川の土手下に位置していた。



福島市旧佐原小学校団地(32戸)。ごく近くまで山が迫っている。



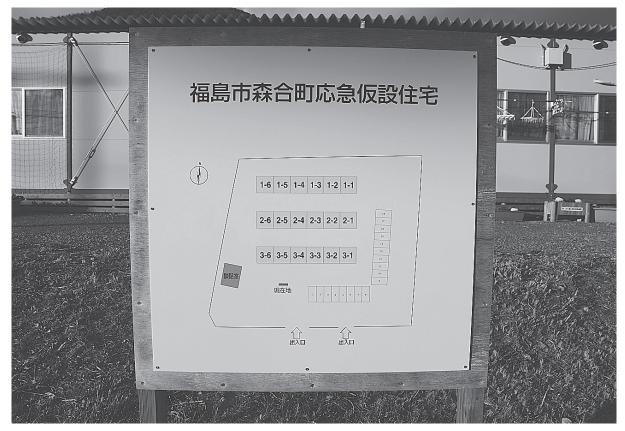
工事をしている。聞くと「駐輪場」を作っているという。



福島市しのぶ台団地(112戸)。



団地の中央に大きな段差がある。上の段から下の棟をみる。



福島市森合町団地(18戸)戸数の少ない団地だが、立地は福島駅近くの市街地であった。



陽が傾き始めた。森合町が今日の巡回訪問の最終地だ。